

神経科学は知覚と判断の境界について何を言うか

飯島和樹 (Kazuki Iijima)

玉川大学

道徳や他者の心といった「ありそでなさそでやっぱりあるもの」(戸田山, 2014)を対象に神経科学研究を進めている評者にとっては、源河氏によるうろんなものごとの自然化への挑戦には大いに奮い立たされるものがある。知覚の哲学と神経科学という、山の反対側から互いに穴を掘り進めることで、いつか隧道が通じるのではという期待を否でも応でも高めてくれる著作である。

当発表では、まず、近年の認知神経科学から、色の反実在論や不在の知覚といった源河氏の論点を支持するような知見を紹介することで、源河氏の試みを更に後押ししたい。しかし、一方で、こうした自然科学の知見の積極的な導入は、源河氏のそもそもの哲学的動機を構成している様々な概念的区分を破壊してしまう可能性も孕んでいる。

ひとつは、意識的な推論と無意識的な推論の区分である。源河氏は、意識的な推論によって導かれた経験は知覚として認めない一方で、無意識の推論は知覚を導く計算過程として認めている。しかし、近年の研究は、意識的な推論によってのみ可能とされていた計算過程の多くが、無意識においても生じることを明らかにしている。意識的な推論の有無によって知覚と判断とを区別する妥当性はどこまで維持できるだろうか。

第二に、そもそもの知覚と判断の区分についてである。近年の神経科学では、ベイズ的な知覚や予測コーディングといったアプローチに大きな焦点が当てられている。これらのアプローチでは、高次の信念や知識によって、知覚がトップダウンに影響を受けると考えられている。知覚が、単に世界を受動的に表象しているのではなく、経験主体の信念によって影響を受けているのだとすれば、知覚と判断の区分は強い意味を持たなくなるのではないだろうか。

最後に、高次モード知覚説が持つ規範的な含意について論じたい。源河氏によれば、美的知覚は、低次の非美的性質と、「趣味」あるいは非美的性質の現れ方(モード)との組み合わせによって説明できる。それによって、対象に美的性質を帰属させることなく、美的性質の知覚が擁護できるという。こうして解消不可能な美的判断の不一致を回避するのである。しかし、美的判断に知覚的な根拠が必要となるのは、判断の不一致が生じた際に「正しい」美的判断を決定するためではなかったのだろうか。高次モード知覚説では、美的判断は個々人の趣味に相対的なものとなるため、そもそも、解消すべき根源的な不一致は存在しないことになる。犬とヒトの間では、トマトを何色と判断すべきかをめぐって争いが生じ得ないのと同様である。源河氏は、美的知覚を擁護すると同時に、それを擁護すべき当初の強い動機を消し去ってしまったのではないか(そして、評者には、それこそが妥当な結果に思われる)。

これらの論点は、源河氏の探究の当初の足掛かりを霧消させてしまうかもしれない。しかし、それも、知覚の哲学の前進のひとつの在り方であるように評者には思われるのである。